

平成 30 年 7 月 25 日

南の風 277

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

女子日本代表のチャイニーズ・タイペイとの強化試合のディフェンスについてです。

まず、相手のスクリーンに対するディフェンスです。ヘッジ（ファイトオーバー）あるいはショウ（日本ではショウハードと呼んでいる）ディフェンス、そしてスイッチが基本パターンでした。

ボールマン（ユーザー）とスクリーナーとの体格差がある場合は、ヘッジやショウで対応し、サイズに差がない場合やスクリーナーのディフェンスが遅れた場合は、スイッチで守っていました。簡単にやられる場面はほとんどなかったと思います。しかし今後、ランキングが上位の国（特シュート力が卓越している選手がいる）と対戦する時は、ブルー／アイスで守ることも必要になると思います。

ブルー／アイスは、日本ではあまり馴染みがありませんが、コートのサイドでのスクリーンで、ボールマンが優れたシューターの場合に使われます。ボールマンディフェンスはノーミドル（リングとボールを結ぶ線上ではなく）で守ります。スクリーナーのディフェンスはぐっと下がります。（エルボー当たり）ボールマンディフェンスは、スクリーナーを意識してピックに掛からないようにしてボールマンにぴったり付き、ドリブルをさせます。（簡単にパスされない）スクリーナーのディフェンスは一気にダブルチームに行きます。当然、スクリーナーには3線がローテーションして付きます。NBAではお馴染みのプレイです。ワールドカップでは、スクリーンに対するディフェンスが一つのカギになります。スクリーンに（特にピック&ロール）簡単にかかるとヘルプ&ローテーションが遅れ、キックアウトから、あるいはエキストラパスから3Pを決められてしまいます。

次に、気になったディフェンスです。

一つ目はスクリーンアウトです。サイズで劣る日本選手は、ターンして背中を相手を押えようとするとしても押し込まれてしまいます。実際、今回の強化試合でそういうシーンが何回かありました。

押し込まれないためには、半身（身体の横）で当たり、相手の圧力に対抗することも考えるべきです。シュート打たれた時、瞬時に半身で身体を当て相手の動きを止め、リバウンドに行く習慣をつけるべきです。日本人はサイズがない分、押し込まれない工夫が必要になります。

二つ目は、ボールマンのドライブに対するディフェンスです。相手がドライブを仕掛けコンタクトしてきた時に、足を引いてしまいペイントへ簡単に進入されることが何回かありました。特にサイズのある選手（日本の選手の中では）のフットワークが気になりました。相手の動きに対する反応力をさらに高め、コンタクトに対して身体の正面で捉えるようなフットワークを身に付けたいものです。

最後に、サイズのあるセンターに対するディフェンスについてです。（この強化試合だけでなく）

私は2016年リオ五輪のオーストラリア戦で、相手のセンターに立て続けにやられたシーンが頭にこびりついていました。2m以上のセンターの守りは、ペイントからでは遅いのです。相手がフロントコートに入る前からフェイスガード気味にピッタリ付いて、行きたい所に行かせないことが絶対必要です。少しでも相手にフラストレーションを溜めさせ、プレイの質を下げシュートの精度を落とさせるようにしなければなりません。ワールドカップに向けての課題の一つです。